

博士課程教育リーディングプログラム 事後評価結果

機 関 名	東京大学	整理番号	B01
プログラム名称	サステナビリティ学グローバルリーダー養成大学院プログラム		
プログラム責任者	三谷 啓志	プログラムコーディネーター	味埜 俊

博士課程教育リーディングプログラム委員会における評価

[総括評価]

概ね計画に沿った取組が行われ、一部で十分な成果がまだ得られていない点もあるが、本事業の目的をある程度は達成できたと評価できる。

[コメント]

リーダーを養成するための学位プログラム、体制等の構築については、英語のみで実施される学位プログラムを構築し、全学的な大学院教育改革の一環としてプログラムが実施され、学内のマネジメント体制が整備されていることは、教育現場の国際化への取組として高く評価できる。一方、日本人学生のプログラム参加者が少なく、日本人学生が海外で実習や研究を行う体制の整備が遅れていることについては更なる強化が望まれる。また、学位の質保証のために厳しいQEを行い、進学者数を絞り込むというカリキュラム設計であったものの、修士課程入学者の博士課程進学率が29.7%(平成24～26年度入学)に留まっており、修士課程から一貫してグローバルな環境において育成する体制が十分に構築されているとは言い難い点については、今後一層の努力が求められる。

修了者の成長とキャリアパスの構築については、①国内外でのインターンシップ参加の機会が少なく、各界のリーダーとしてグローバルに活躍するキャリアパスにつながる就職を支援する体制が整っているとは言えない点、また、②多くの留学生と日本人学生の交流を活性化することが必要である点、③修了者を含む学生の活躍状況の把握についても、一般的な手法の列挙に留まっている点については、今後一層の努力が求められる。

事業の定着・発展については、学長のリーダーシップ体制の下、本プログラム専任教員の配置を行うとともに、本プログラムの安定的継続を予定していることは評価できる。しかし、東京大学として「サステナビリティ学国際卓越大学院（仮称）」への展開以外には、特筆すべき本プログラム自体の定着・支援方策がとられているとは見なし難い。学外の連携先機関、特に国際機関との外部連携の継続について、更に強化していくことが期待される。

事後評価結果案に対する意見申立て及び対応

機 関 名	東京大学	整理番号	B01
プログラム名称	サステイナビリティ学グローバルリーダー養成大学院プログラム		
プログラム責任者	三谷 啓志	プログラムコーディネーター	味埜 俊

意見申立て内容	意見申立てへの対応
<p>【申立て箇所】</p> <p>(第一段落 4行目～7行目)</p> <p>一方、日本人学生のプログラム参加者が少なく、<u>日本人学生が海外で実習や研究を行う体制の整備が遅れていることについては更なる強化が望まれ、日本人学生を修士課程から一貫してグローバルな環境において育成する体制が構築されているとは言い難い点</u>については、今後一層の努力が求められる。</p> <p>【意見及び理由】</p> <p>(意見)</p> <p>本プログラムでは「日本人学生の数が限られており、今後、その入学数を増やし日本人学生の国際化に更に貢献する必要がある」という課題は認識しておりますが、カリキュラム全体として「<u>修士課程から一貫してグローバルな環境において育成する体制が構築されているとは言い難い</u>」とされているように読めることについて、「日本人学生が海外で実習や研究を行う体制の整備が遅れていることについては更なる強化が望まれ、今後一層の努力が求められる。」とし、「日本人学生を修士課程から一貫してグローバルな環境において育成する体制が構築されているとは言い難い」は削除して頂くことを希望致します。</p> <p>(理由)</p> <p>「日本人学生」の数については、日本人の博士課程在籍者は全員が日本学術振興会特別研究員 (DC) に採用されるなど、精鋭で質の高い</p>	<p>【対応】</p> <p>以下のとおり修正する。</p> <p>一方、日本人学生のプログラム参加者が少なく、日本人学生が海外で実習や研究を行う体制の整備が遅れていることについては更なる強化が望まれる。<u>また、学位の質保証のために厳しいQEを行い、進学者数を絞り込むというカリキュラム設計であったものの、修士課程入学者の博士課程進学率が 29.7% (平成 24～26 年度入学) に留まっており、修士課程から一貫してグローバルな環境において育成する体制が十分に構築されているとは言い難い点</u>については、今後一層の努力が求められる。</p> <p>【理由】</p> <p>1 文目では、①英語のみでのプログラム実施、②全学的な改革の一環としての取組、③学内マネジメント体制の整備については評価した。一方、2 文目については、計画調書にて掲げていた修士課程入学者の博士課程進学率が当初の目標値(40%)を達成しておらず、修士課程から一貫して育成する体制が整っているとは言えない。</p>

学生を輩出してきましたが、数の獲得については、引き続き努力を重ねる所存です

しかし、サステナビリティ学博士育成において修博一貫の学位プログラムが確立していることは、事後評価結果（案）第1段落でお認め頂いている通りです。学位の質保証のために、修士課程から博士課程への進学に際してサステナビリティ学博士に求められる能力や適性についての厳しいQEを行い、進学者数を絞り込むというカリキュラム設計は、申請書においても強調し、採択されたプログラムの一部であると認識しています。

「グローバルな環境」についても事後評価結果（案）第1段落で教育現場の国際化への取組として高く評価頂いている通り、日常の学修環境は完全に英語化され、英語のみによるカリキュラムと事務システムが定着し、多様な国籍の留学生と日本人を区別無く扱う模擬国際社会といえる状態が創出されています。また、履修生国籍の多様性が確保されているのに加えて、毎年度開催する国際シンポジウムや世界各国のパートナー大学と共同で実施するフィールド演習、調査研究の実施等により、履修生はプログラムを通してサステナビリティに関わるグローバルなネットワークに参画し、それを研究調査やキャリア構築に利用することが可能になっていることから、修士課程から一貫してグローバルな環境において育成する体制が構築されていると言えます。

【申立て箇所】

（第二段落）

修了者の成長とキャリアパスの構築については、国内外でのインターンシップ参加の機会が少なく、各界のリーダーとしてグローバルに活躍するキャリアパスにつながる就職を支援する体制が整っているとは言えないことから、まずは多くの留学生と日本人学生の交流を活性化することが必要である。また、修了者を含む学生の活躍状況の把握については、システムの構築に至ったとは言い難く、今後一層の努力が求められる。

【対応】

以下のとおり修正する。

修了者の成長とキャリアパスの構築については、①国内外でのインターンシップ参加の機会が少なく、各界のリーダーとしてグローバルに活躍するキャリアパスにつながる就職を支援する体制が整っているとは言えない点、また、②多くの留学生と日本人学生の交流を活性化することが必要である点、③修了者を含む学生の活躍状況の把握についても、一般的な手法の列挙に留まっている点については、今後一層の努力が求められる。

【意見及び理由】

(意見)

1点目として、「グローバルに活躍するキャリアパスにつながる就職を支援する体制」についてのご指摘と「多くの留学生と日本人学生の交流を活性化することが必要」とのご判断に関して、それぞれ相応の成果を上げていると判断しています。そのため、下線部分の内容を削除して頂くことを希望致します。

なお、本プログラムとしては「グローバルに活躍するキャリアパスに繋がる就職支援」と「日本人と留学生の交流の活性化」の2点は、次元の異なる事柄であると考えております。

次に2点目として、修了生を含む学生の活躍状況を把握するシステムの構築に至ったと言い難いという標記について、下記の理由によりシステム構築が進んでおりますので、削除して頂くことを希望致します。

(理由)

まず、1点目に関して、本プログラムでは、履修生が、インターンシップだけではなくカリキュラム全体を通して実社会と密接にかかわりながらグローバルに研究活動を展開し、それを通して自己のキャリアパスを構築することを支援するような設計となっております。その結果として、国際機関や国際NGO、自国政府機関、民間企業など、申請時の趣旨に沿った就職の実績を上げはじめています。

一方、留学生と日本人学生の交流については、院生室共有などの日々の学修環境に加えて、毎週実施する必修のセミナーやフィールド演習を含む本プログラムが独自に構築したカリキュラムの履修を通して、プログラム履修生が日本人か留学生かの別なく交流する環境が整っています。加えて、事後評価結果(案)第1段落で高く評価を頂いた通り「教育現場の国際化への取組」の好事例として、本プログラムが拠点とする本学柏キャンパス全体の国際化、ひいては研究科全体の日本人学生のグローバル化にも貢献しています。

以上の理由から、「グローバルに活躍するキャリアパスに繋がる就職支援」と「日本人と留学生の交流の活性化」についてはそれぞれ相応の成果を上げていると考えており、下線部を削除して頂くことを希望致します。

次に、2点目の修了生を含む学生の活躍状況

【理由】

①インターンシップの実績が少ないことに加えて、具体的な取組の明示がなく、キャリアパスにつながる就職を支援する体制が整っているとは言えない。また、②学生間の交流についても、日本人学生が留学生と触れ合う環境を整えるのみで、多くの留学生を活かした具体的な取組が講じられているとは見受けられない。そして、③修了者を含む学生の活躍状況の把握についても、名簿及びSNSを利用した方法に限られており、一般的であることから、効果的なシステムの構築に至ったとは評価できない。

については、事後評価調書（Ⅱ-4）に述べた通り就職先等を独自に把握する仕組みは完成し、プログラム事務局の業務として定着しています。それがきちんと機能していることは、就職先情報や受賞の状況を事後評価調書でご報告できていることに示されます。さらに、単なる情報把握にとどまらず、修了生を本プログラムの教育資源として活用する仕組みも整備してきました。例として、本プログラムのサステナビリティ学高度専門教育プログラムとしての特徴や開発される能力と、カリキュラムの関係を、修了生（ノンアカデミア）が学術論文として発表したものをプログラム改善に活かしていること、国際機関の勤務経験を持つ修了生の講師としての招聘、フィールド演習の現場側担当者コーディネーターとしての協働などがあります。このように、活躍状況を長期にわたり把握しプログラムにフィードバックするシステムは構築されていると言えます。

【申立て箇所】

（第三段落 3行目～5行目）

東京大学として「サステナビリティ学国際卓越大学院（仮称）」への展開以外には、特筆すべき具体的な定着・連携方策が見られるとは見なし難い。学外の連携先機関との外部連携の継続について、更に具体性を高めていくことが期待される。

【意見及び理由】

（意見）

「特筆すべき具体的な定着・連携方策が見られるとは見なし難い。学外の連携先機関との外部連携の継続について、更に具体性を高めていくことが期待される。」というコメントについて、プログラムの定着と外部連携の継続はすでに具体化されておりますので、削除して頂くことを希望致します。

（理由）

プログラムの定着・発展について、事後評価調書 33 ページ（Ⅲ-2 ①）に述べたように、博

【対応】

以下のとおり修正する。

東京大学として「サステナビリティ学国際卓越大学院（仮称）」への展開以外には、特筆すべき本プログラム自体の定着・支援方策がとられているとは見なし難い。学外の連携先機関、特に国際機関との外部連携の継続について、更に強化していくことが期待される。

【理由】

発展を想定した体制（「サステナビリティ国際卓越大学院（仮称）」への展開、大学全体としての予算規模）については理解できるものの、本プログラム自体の今後の定着・継続性及び当該体制以外の支援方策について、詳細が不明であり、評価できない。また、学外の連携先機関については、継続するための具体的な方策が見られるものもあるが、特に国際機関についてはより安定的な継続を目指し、連携・継続を強化していくことが期待される。

士学位を独自に発行する学位プログラムとして専任教員、運営予算とも確保され、通常の専攻とほぼ同じ振る舞いをする教育組織として研究科に定着しています。研究科が発行する入試案内書には、正規課程生を受け入れるプログラムとして他の専攻等と併記され、H30年度入学者の入試もすでに開始しました。合格者の一部はすでに発表済みです。さらに、本学の「サステナビリティ学国際卓越大学院」への展開は、リーディング大学院事業の成果として定着したこの学位プログラムを幹事組織として行われることも決定しています。

学外の連携先機関との外部連携の継続については、すべて継続についての合意がなされています。具体的には、ヒアリングスライド#8や#21に示したとおり、国連大学との単位互換制度や協同修了証プログラムの継続や、国内外の大学（ナイロビ大学、チュラロンコン大学、ルンド大学、等）や自治体・NGO等（柏市、熊本県、水俣市、岩手県、大槌町、等）、民間企業（博報堂、三井不動産、等）との連携によるフィールド演習やレジリエンス演習の協同実施の継続があります。